

巻頭言

食品クラスターについて

法政大学 学事顧問 清成 忠男

ヨーロッパで食品クラスターが注目を浴びている。もともとクラスター概念はヨーロッパ発である。産業集積に関する研究は、A.マーシャル以来100年近い歴史を有している。その後、ドイツのA.ウェーバーやA.O.ハーシュマンが研究の進展に貢献している。

画期的な問題提起を行ったのはウィーン経済研究所のG.フツェンライターとM.ペネダーである。クラスターという概念を初めて用い、イノベーション促進政策を提案した。1994年のことである。彼らは1996年から97年にかけて、さらに論文を発表している。

ハーバード大学のM.ポーターがクラスターに関する論文を発表したのは、1998年のことである。この論文によって、クラスター論が急速に普及するようになる。

さて、この数年、ドイツにおいてクラスター論が急速に精微化している。1999年に連邦の経済・技術省によるクラスター支援政策が始まり、「草の根」のクラスターが数多く登場した。イノベーションの促進を目的にして、全国的に100カ所以上のクラスターがスタートしたのである。ただ、こうしたクラスターは必ずしも成功するとは限らない。民間の研究者集団による詳細な検討が進み、クラスターの構造、組織、運営のあり方が検討され、イノベーション・マネジメントの解明も進んだ。

ヨーロッパ諸国及びEUにおいても、クラスター研究が活発化し、政策も展開された。政策面で国際的な連携も進んでいる。

現実のクラスターは、1990年代以降、ヨーロッパ各国で急速に増加している。業種的には、研究開発集約的な先端産業が多い。ただ、既存産業においても、新しい視点から質的向上がはかられている。

注目すべきは、第1次産業と関わりの深い食品クラスターである。オランダ、フランス、ドイツ、ノルウェー、スウェーデン、デンマークなどの国に、食品クラスターは広く分布している。共通の目標は、食品産業のイノベーションである。

代表的な存在は、オランダの「フード・バレー」で

ある。食品の「シリコン・バレー」といわれ、「食品都市」ワーヘニンゲンに立地している。1990年代から集積が進み、ワーヘニンゲン大学を中心に数多くの研究機関が集まっている。第1次産業の現場はオランダ全体に分布しており、「フード・バレー」

には頭脳部分が集積している。100社以上の企業等のネットワーク組織であるフード・バレー協会が存在しており、イノベーションの促進が協会の事業目的である。ワーヘニンゲン大学などの研究機関との連携も密である。農業技術、食品科学、植物科学、さらには応用分野として特定食品のイノベーションとマネジメントが主要な研究分野である。バイオナノテクノロジー、バイオプロセス・エンジニアリング、高付加価値種子の開発、等々において強味を発揮している。

また、ドイツ連邦政府の関係機関は、本年4月「ドイツの食品クラスター」と題する報告書を発表している。同書には四つのクラスターが紹介されている。すなわち、「フード・レギオ」(2005年設立、50機関、食品加工産業、リューベック市)、「GIQS」(2001年設立、45機関、農食品の研究、ボン市)、「NieKE」(1999年設立、140機関、食品加工・食品安全性等、フェクタ市)、「食品加工・イニシアティブ」(2000年設立、115機関、食品加工・食品科学等、ビーレフェルト市)の四者である。いずれも、産学連携という特徴を有している。「GIQS」のボン大学と前述のワーヘニンゲン大学は研究面で提携している。

なお、ドイツのバイエルン州は産業政策の一環としてクラスター政策を採用しているが、食品クラスターをも重視している。

わが国においても、クラスター形成による6次産業化の飛躍が期待される。

